

ROTARY CLUB OF

KANAZAWA-NORTH WEEKLY



金沢北ロータリークラブ

例会日：木曜日 12:30～13:30

例会場：卯辰山・ホワイトハウス

事務局：金沢市尾山町9-13・金沢商工会議所

TEL <0762> 63-1151

会長：山田 安隆 幹事：大村 精二

会報委員長：清水 忠

1974・5月23日

第16号

手づくりの美しさ



木工芸家 氷見 晃堂氏

私の制作の対象は木である。

木には生命があり、朝に夕にちがった表情や風合いを持つ。

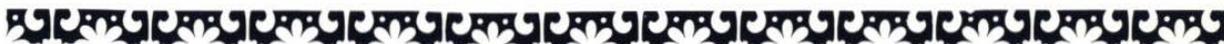
一方、木に取りくむ制作者の私も、^{なまみ}生身の人間である。喜怒哀楽という感情の交錯や、体調に無縁ではない。

したがって、最高の美を追求しながらも、自分の作品に完璧という自信を持ったことはない。確実にいえることは、毎日毎日が「材」と「枝」への斗いであり、その斗いの過程がそのまま、作品となってあらわれるということである。

若し、手づくりの美しさというものがあるとすれば、それはこの「材」と「枝」への斗いの尊さということであり、それが人間誰しにも感動と共感を与えるのではないだろうか。

—金沢北RC例会卓話より—

(文責 清水 忠)



かなざわ文学散歩

—「北国の美女」—

京都から金沢へ来てから、茶席や宴席で見た女の顔は随分あるが、その中で三つの型が加賀の女にあることが分った。

一つは能の女面に代表されているような典型的な日本古来の美人顔である。

第二は玉子型の輪郭に、ぬいこんだようなつぶらな目がいきいきと冴え、文楽の女人形のように肩が丸くすくんだ恰好である。

第三はこれら保守的な顔型とちがって鼻が鋭角的に高く、目のくぼみの深い、北欧的な知的で清澄な感じの女性である。

北国の女性は、日本人の血に、日本海を渡って来たロシア人の血でも交っているのではないかと思われる。

—円地文子作「雪燃え」より—

私 の 名 刺

清 水 忠



昭和6年、満洲事変の年に私は生れた。それからの日本は、支那事変、太平洋戦争そして敗戦、それに続く戦後の混乱と、まさしく狂乱怨濤の4半世紀を歩むことになる。

終戦の年、私は金沢三中の2年であった。校庭の桜の美しさよりは、教練の苦しさの方が印象的であった。戦後の混乱期は、赤煉瓦の学舎で四高最後の灯をともした。暗い時代だった。生きる方向を見失って自殺する者が友人の中に幾人もいた。そして城跡の金沢大学に学んだ頃は、世の中は朝鮮動乱と内灘斗争に明け暮れていた。

そういった激動期に多感な青年時代を送った私にとって、歴史の流れが、人間形成に大きな影響を与えたことを否定できない。

価値観の混乱や存在への不安の中で、陽光よりは陰翳を、旭日よりは落日を好む性格がいつの間にかできていた。

しかし人間は、いつまでも自分だけの世界に沈潜している訳にはいかない。人生の傍観者から脱して社会的使命を意識しはじめた頃は、すでに齢40を過ぎていた。

今私にとって必要なことは、過去の体験や知識からの脱皮である。そういった意味で、卯辰山頂の秋声文学碑の言葉“体験や知識を片っ端から切りはらうところに、人の真実がみがかれる”という訓えは、私の玉科信条となっている。

職業は漁網とゴルフネットの製造。趣味は山歩きと音楽。三姉妹の父として、ロータリアンのご子息に縁あることを心から希っている。

土 原 ^{かつ} ^じ 一 二



はっきり癌だと当人に云えない苦しさがあるかと思えば、最後の処置が奏功して病状好転という事例にぶつかるのが我々開業医の日常です。さて私は大正元年8月大樋町で生れ、13のとき父を、25のとき母を失って大変淋しかったが、幸い年令差の大きい姉二人に励まされて成人したので、今でも姉達を親の様に思っている。森山町小学校、金沢三中、第四高等学校理科乙類、金沢医科大学と運良く進んで昭和13年に大学を卒業した。引続き母校の生理学教室で基礎医学を勉強し、次いで熊埜御堂外科に入局。折しも戦時下で医局員は続々と応召し、常時40名余りの者が、教授、助教授以下4名位となり、仕方なく4年生の学生10名許りに応援を求めた。その上、臨

時医専、学部の講義を受持たされ、今思うとどうしてやって来たものやら。終戦と共に皆が次々と医局へ戻って来たので、意を決して昭和22年4月、現住地で開業し今日に至った。その間鳴和中学桜丘高校の校医をつとめ、学童、生徒の体位向上と健康増進とを念願し、又、市医師会、本年度からは県医師会の役員末席を汚して微力ながら地域医療に心を傾けている。

家族は妻弘子(53)、長男一弘(33、金大第2外科勤務)、嫁敦子(29)、孫の一哉(6)、一真(4)、一生(2)の賑かな家庭です。長女則子(30)は、森紀喜(33、泊病院整形外科医長、森喜朗代議士実弟)に嫁し、啓子(7)、康子(5)の二女を有し、次男の一英(26)は家内の実家の宮林家を継ぎ、名古屋のNHK中部本部に勤務し、昨年慶子(26)と結婚した。趣味は家庭園芸と麻雀。

私の考えるロータリー (14)

ロータリー情報委員長 柴田 三郎

—金沢北RCのロータリー意識 (1)—

Stop and Think (立ち止まって考える) という名言がある。このクラブも既に半歳を経過したので8項目のアンケートを求めて意識度を調査した。その結果は4月18日の例会において清水会員から、また会報15号にてその集計表が発表された。

本来は、創立総会の以前に会員候補者に対し、充分にロータリーの綱領、定款、細則など解明した上で入会の去就を自主的に決めてもらうのが立前であったが、結果的には卑俗な表現ではゴウカンであり、善意には御本人の意志はともかく、見込まれ望まれた人々で発足した。

不満や疑問を抱えたまま前進を続けることは無責任であり、皆んなの不幸につながるであろう。と、考えたのがこんどの意図で、38人中37人がお答えくださって、しかも無記名で率直に意志表示していただいただけに、貴重な資料となった。以下、内容の概略を報告しつつ“私の考えるロータリー”の一環にいたしたい。

ロータリーに入会して……よかった29名、まあまあ8名で、入会を後悔している人のなかったのは幸いである。まあまあの人々からも傾聴すべき意見の提起されているのは収穫である。まあまあの人々が、やがて“よかった”に前進するクラブとならねばならないと思う。その訴えには人間関係についての不満が見立つ。即ち、「規約にとらわれ、本当の人間対人間の交際にとほしいような気がする」「若干の経験者の中には話しかけても素知らぬふりする人がある」「親しい中にも礼儀と平等の態度が欲しい」などである。ロータリーが同志の結合であり、修練と友好を目指す上からも、お互い深く心すべきことである。

また「例会を1時から2時に変更して欲しい」「例会は夜ゆっくり」の意見がある。こうした希望には理解できるが、全国の各RCの殆んどが統一されて、12時30分から1時間に定着しているのは全国的に交流できるメイクアップの人のための利便でもあり、当クラブだけの例外は不可能ではないが、対外的に至難であろう。但し、月1回くらい夜の例会をゆっくり開催し、ひざをまじえて語り合うのは極めて効果的である。その場合はその都度、時間変更を広く通知するのが立前えとなっている。

例会出席について……は、苦勞している12名、きびしく言わないで2名があり、あとの25名は万難を排して皆出席を目標としているのである。ロータリーの例会は、ロータリーの修練の道場であり友好を積むグラウンドであるが故に、出席の原則は崩されてはならない。そのためにメイクアップの便法もある。病人がタンカに乗せられて例会出席を全うしたという話もあるが、ロータリーにはそのような非情があってはならないことは言うまでもない。

ロータリーに入会してよかった……の理由の中で多かったのは「卓話、修身、交友」「地域社会のリーダー的人物と毎週口をきける」「友好が広がる、学ぶところ多い」「奉仕、友愛、勉学の精神の自覚を深めた」「いろいろの職業人に接し、広い良識を得、卓話が楽しい」「自制心が強くなる」等々、ロータリーの本質をつかんだ反応の出ているのは、創立日浅き当クラブの意外なる輝かしい成果とすべきである。特に「四つのテスト、ロータリアン信条への挑戦」と言う意欲的な心がまえに至っては、頼もしくもあり、敬服の他なく、これこそロータリーと頭のさがる思いを禁じ得ない。

